

## 真心

上原 舞 (高知市)

嫌われてもいい  
恨まれてもいい  
理解されなくてもいい

人は そう思っただけに接した時

その人の 本当の心が

相手へ伝わるのだ

若いひとの率直性が語られている一編。たしかに若いときはなにかを決意することで自分を一歩前に押し出せることもある。ためらっている自分を自分の言葉で後押しできることがある。きつと上原さんもいま、そんな気持ちになっただけで、おもしろい言葉が発したのだとおもう。若いひとの心情がストレートに伝わってくる一編だが、「真っ直ぐな言葉」という抽象的な言

唯唯 真っ直ぐな言葉を  
発するだけでいいのだ

言葉を優先させないで、上原さんにとって「真っ直ぐな言葉」とはどういう言葉なのか、あるいは、その真っ直ぐな言葉が生まれてくるまでの自分の軌跡はどんなものであったのか、また、その言葉にたいして相手はどう反応したのか、そういう具体を読みたいとおもう。

## 白い雪 白い空

大江 碧（高知市）

白い雪の上に

白い私を描く

いつまでも 白のままではいるように

白い空の上に

白い私を泳がせる

いつまでも 自由でいるように

白い雪も 白い空も

私の中で解き放たれて

私の中で縛られて

私の中で眠りに就く

私の中で 何事もなかったかのように

静かに寝息を立て始める

そして 私は 雪や空と

ひとつの形になって行く

私という頼りない形に

ここしばらく大江さんの作品は理屈がおおかった。理屈（作者の思考過程）はひとの体でいえば骨格のことだろう。その上に、論理としての筋肉、修辞としての脂肪、感情としての血流、倫理・非倫理としての皮膚が骨格を覆っている。ここでいう雪とか空は、大江さんの「こうあってほしいわたし」あるいは「こうあってほしいわたし」ながらもうまくいかなかったわたし」と受け

とっていいだろう。ひとは、ここまで自分だ、といえたとしても（それが自己幻想であったとしても）、その先はわからない。しかし、その境界線は意識できるし、いうことはできるかもしれない。だから、「解き放たれ」「縛られ」と二律背反的な「わたし」という境界線の先に「ひとつの形」になっていくわたしが見えているのだろうか、頼りない形であったとしても。

## 今日も見た

大崎 哮子（高知市）

親の躰をすんなり受け止め  
賛美すらしたのでしょいか  
他人の言葉に舌鼓を打つな  
と、諭らされたのでしょうか

困いから飛び出した男  
は、他人の言葉を噛み砕けなかった  
同胞を家来とも錯覚しているのでは  
男は暴走しはじめた

歓喜の声をとどろかして

親の教訓を糧して  
国家をもまな板に載せ  
両刃をひけらかせ 料理を始めた男

ふつつつ ふつつつと沸き上がっている  
泉の音にも感知せず  
人間の香りも漂って来ない男  
が、走り続けているのを  
今日も見た

大崎さんが戯画的に描写している男はどこにでもいる。自我意識の強さを前面に押し出し、他者との違いをうけいれることなく、うけいれるどころか、他者との違いを鮮明にすることが、みずからのアイデンティティを実現することだと信じている。ヒトの体は日々細胞が壊れ再生し、一年ぐらいですっかり別な細胞に変わってしまうのだが、この手の男は、壊れゆく細胞を後生大

事に抱えて、壊れた細胞が臭気を放っているのにも気づかないようだ。とうぜん人間の香りなど漂ってくるはずもない。大崎さんはこの男の典型が、日本の民主主義の頂点に立つ男であり、こんな男に日本が引きずられていくのは不本意だ、といっている。

## 小さな花

小笠原鈴子（大豊町）

春には棚田のふちに小さなアマナが揺れる  
夏には庭にヒメヒマワリがそよぐ  
秋には神社の近くにアケボノソウが咲く  
冬には畑に福寿草が咲く  
今年には雪に埋もれたが  
陽がさすと凜として花をもたげた  
仕事に走り続けていた頃  
小さな花に気付かなかった  
そううつ病になり寝たきりの日が続いた

小笠原さんがであうのは「小さな花」である。ひとは、自分に出会いそこねたり、他者と出会いそこねたりして、自分の居場所を見失ってしまうとさがある。そんなころもとない日々のなか、小笠原さんは、棚田のふちのアマナ、庭のヒメウリ、神社の近くのアケボノソウ、畑の福寿草、と四季折々のちいさな花になぐさめられてきた。いまはまだ自分のおもいどおりの

少し体調が良くなると家の周りを歩いた  
すると小さな花に出会った  
友達が花の名を覚えてくれた  
小さな図鑑で花の名前を知った  
やがて写真を撮るようになった  
初めて私に興味ができた  
病気になったが  
小さな花が私に喜びを与えてくれる

体調ではないかもしれないが、ちいさな花が、出会いそこねた自分や、やさしい他者を呼び込んでくれるような気がして、ちいさな、ちいさな、花に感謝している。

## 青ざめた朝

加藤 敏人（高知市）

柿が色づく頃 北山に霜がふった  
虫たちは もう地中に帰ったのか  
静かな草むらは 旭が照らす  
虫たちの起きる気配はなかった

僕は一晩中かけて 手紙を書いた  
北山にある集配人の来ない  
ポストへ出しに行く  
自転車のペダルは殊の外きつい

覚悟はしていた きつすぎる坂道  
宛名のない手紙 投函を目指す  
青ざめた朝 僕はペダルを漕ぐ  
孤高のポストは ずっと先にある

加藤さんが一晩中かけて書いた手紙とはどんな手紙だろう、とおもうことからこの詩を読む楽しみははじまる。宛名の書かれていない手紙は集配人の来ないポストに出しに行く。青ざめた朝に坂道を、ペダルをこぎながら。この無為の行為、あてのない行為、自傷にも似た行為はきつと、加藤さんの内面に加藤さん自身をひっくりかえすような何事かがおこったからにちがいない。

い。なぜならそのポストは「孤高」であるから。他者と妥協することなく、自説のみを頼りに生きていこうと決意した裏にはどんなことがあったのかわからないが、ひとはおおかれすくなかれ、ときとして、そのような決意をするときがある。みずからを鼓舞しながら、みずからの存在理由の根拠をたずねるといふ真摯な青ざめた朝をもつとさがある。そしてやがて、ひかえめな夕暮れがやってくる。

## 私とわたし

川久保悦子（高知市）

私とわたし

私が今日は仕事が出来だからねなさい

わたしはねたらいかん、くせになる

私とわたし

つねにあい反する答えがとび出す

仕事の日も

私は足こしが痛けりゃ一日ぐらい休め

わたしはタクシーに乗って行かないかん

私はそんなお金はもつたない休めばいい

ひとは天使と悪魔どころか、数百数千の「私とわたし」を生きている。そんなたくさんのわたしを生きていると、どのわたしがわたしなのか、自分でもわからなくなってしまうときがあつて、そうなるとひとは、自分は自分を甘やかせているだけかもしれない、と自己嫌悪におちいってしまふことがあつたりするが、自己嫌悪におちいっている、ということを見ているわたしがいて、

わたしは自分の為に行っているのだから…

つねに私とわたしが対立している

心というものは不思議なもので

ころころと人を変えてゆく

私とわたしも

みんなもっている二人の人間

天使とあくまのささやき

選ぶのは自分、貴方だったらどっちをとる？

そういうわたしを、「けっこう、ちゃんと見てるじゃない」と感心しているわたしがいて、「そういうわたしもまんざらじゃないな」と安心しているわたしがいて、ひとはそうやって、何人ものわたしに助けられて生きている。川久保さんのこの作品にはそのことが語られている。